

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：28001

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03229

研究課題名（和文）日越交流史の新展開-ゲティン地域における朱印船貿易解明のための考古学調査-

研究課題名（英文）Study for the next evolution of the exchange history of Japan and Vietnam: Archaeological survey for exploring trade activities of Red Seal ships (Shuin-sen) in the Nghe-Tinh region

研究代表者

菊池 百里子（阿部百里子）（KIKUCHI, YURIKO）

沖縄県立芸術大学・付置研究所・研究員

研究者番号：50445615

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ベトナム・ゲティン地域における考古学発掘調査や水中考古学調査、日本関連史資料調査により、日本とゲティン地域の交流の歴史を総合的に組み立てるものである。ゲティン地域の朱印船関連遺跡で実施した発掘調査では、16～18世紀の中国やベトナムの陶磁器が出土し、これらの地点が17世紀の朱印船貿易時代には居住域であったこと、陶磁器類はゲティン地域の港であるホイトンからもたらされていたことなどが確認できた。ラム川河口部で実施した水中考古学調査においては、沈没した朱印船の船体は確認できなかった。しかし、海底の状況など、今後沈没船探査を実施していくための基本的な情報を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東南アジアの港市に出現した日本人は、「キリスト教弾圧」や「関ヶ原」「鎖国」「禁教」といった日本史の重要なトピックスの結果であり、日本の歴史の一部である。ゲティン地域における朱印船関連遺跡の考古学調査研究は、朱印船貿易時代のみならず、鎖国後に帰国できなくなった日本人の商業活動や海域アジア交易ネットワークにはたした役割の解明に資するものであり、ベトナム史のみならず日本近世史、海上交易史、日越交流史の各研究にも新たな展開をもたらし、その進展に大きく貢献する意義を有する。

研究成果の概要（英文）：This research aims to reconstruct the history of exchanges between Japan and Nghe Tinh region by conducting archeological excavations, underwater archaeological surveys, and research on Japanese historical materials in Nghe Tinh region, Vietnam. Excavation surveys conducted in Can Loc district, which was related to Japan in the 17th century, excavated Chinese and Vietnamese ceramics produced in the 16th to 18th centuries. From these survey results, it was confirmed that these sites were residential areas in the 17th century, and that these ceramics were brought from Hoi Thong site, the trade port in the Nghe Tinh region. In the underwater archaeological surveys conducted at the mouth of the Lam River, we could not confirm the wreck of the Red Seal ship. However, we were able to obtain basic information such as the condition of the seabed for carrying out exploration of sunken vessels in the future.

研究分野：ベトナム歴史考古学

キーワード：ベトナム 考古学 朱印船 ゲアン ハティン 水中考古学 日越交流史 陶磁器

1. 研究開始当初の背景

本研究が対象とするベトナム北中部のハティン省、ゲアン省(以下、ゲティン地域)は、10世紀に成立した大越国の南側にあたる。チャンパー国との境界線に近く、大越国にとっての南の要衝である。両省の省境を流れるラム川は、南シナ海とラオスをつなぐ水路であり、インドシナ半島内陸部にとって、南シナ海交易圏への出口であったことから、ラム川の重要性が指摘されてきた。ラム川河口のクアホイは、ベトナムの15世紀の史書『抑齋遺集』に「会統」と記され、国際貿易港のひとつであった。

中国や日本を出港した船が、海南島の東南側を通過すれば、たどり着く先はゲティン地域であり、中国人や日本人が欲した香木などが採集できるラオスを後背地として有している。アジア交易ネットワークが活況を呈する近世になると、この地域にはキリスト教の宣教の拠点が置かれるとともに、豪商角倉氏の朱印船が度々渡航していた。

ゲティン地域はベトナム史にとっても日本史にとっても重要な研究フィールドであり、申請者は、科研費(研究活動スタート支援)を受け、2015年よりゲティン地域における考古学調査を開始した。ラム川における交易活動をしめす具体的な考古資料を系統的に提示するための初めての考古学調査に位置付けられる。

ラム川流域での発掘調査では、角倉船の寄港地義安(ゲアン)の興元の位置を特定するとともに、当該地点において17世紀から19世紀の中国の貿易陶磁器を確認した。また、ラム川河口部のホイトン地区での発掘調査では、木杭列などの遺構が確認できたほか、14世紀から19世紀のベトナム陶磁器や中国陶磁器、日本の陶磁器が大量に出土した。このため陳朝期の文化層で発掘調査を一旦中断し2016年度の発掘調査を終了した。現在、出土遺物の整理作業に取り組んでいる。また、ラム川流域の遺跡踏査では、フンカイン村で17世紀の石碑を、ハタイン村で17世紀の陶磁器の分布を確認し、17世紀の居住空間の広がりを認識する成果を得た。

さらに、調査中に日越関係史に新たな研究材料を提示する日本関連史資料の発見情報を入手した。それは、ラム川河口部において、火縄銃や大砲が発見されたこと、沈没した角倉船から救出された日本人の名前が家譜に残されており、その日本人墓が現存しており、その子孫が現在もハティン省に在住している、というもので、実際にその子孫と面会し家譜の説明を受けることができた。これらの調査研究成果は、ゲティン地域を日越交流の新たな研究フィールドに押し上げるブレイクスルーとなった。

2. 研究の目的

本研究は、2015～16年に研究代表者が実施したベトナム北中部ゲティン地域の考古学調査・研究から得られた成果から、日本とベトナムの交流の歴史の解明に焦点を絞り調査研究を実施する。特に、日本関連史資料について専門家との共同研究体制を構築し、学際的な研究へと発展させるものである。ゲティン地域には朱印船がたびたび寄港し交易活動を行っており、当該史資料の総合的な調査研究により17世紀の日本人商人の活動を考察する。また、ラオスに繋がるゲティン地域のラム川流域で発掘調査や水中考古学調査を実施し、出土陶磁器の比較分析から、インドシナ半島内陸部と南シナ海を結ぶハブ港としてのゲティン地域の役割や構造、朱印船へ商品を生産していた東南アジア大陸部東西回廊による交易の様相を解明する。

大越国の対外貿易活動の研究には、ベトナム人や各国の研究者らが盛んに取り組み、朱印船の交易や日本町研究も多大な研究蓄積があるが、ゲティン地域がこれまで研究の俎上に上がることはなかった。本研究は、ゲティン地域にスポットを当て、発掘調査や水中考古学調査を実施し、出土した中国や日本、ベトナム陶磁器とラオスや海域アジア各地で出土した陶磁器とを比較分析する。人や物の移動や交易による商品連鎖、地域と世界市場といったテーマの事例研究としてグローバル・ヒストリー研究に貢献する意義を有する。

また東南アジアの港市に出現した日本人は、「キリスト教弾圧」や「関ヶ原」「鎖国」「禁教」といった日本史の重要なトピックの結果であり、日本の歴史の一部である。ゲティン地域における日本関連史資料の調査研究は、朱印船貿易時代のみならず、鎖国後に帰国できなくなった日本人の商業活動や海域アジア交易ネットワークにはたした役割の解明に資するものであり、ベトナム史のみならず日本近世史、海上交易史、日越交流史の各研究にも新たな展開をもたらし、その進展に大きく貢献する意義を有する。

17世紀の日本とベトナムの交流の舞台は、これまで、ベトナム中部の世界遺産ホイアンを舞台として語られてきた。本研究は、日本とベトナムの交流史にゲティン地域というあらたな研究テーマを投入し、グローバルヒストリーの視座から多角的に朱印船貿易を捉えなおすものであり、積極的な社会発信や国際発信により、当該研究領域を国際的な研究に押し上げる。

3. 研究の方法

本研究は、発掘調査によりゲティン地域形成史を明らかにするとともに、朱印船に商品をもたらした東南アジア大陸部東西回廊ルートを究明する。また、水中考古学調査により新たな日本関連資料を掘り起こすとともに、ゲティン地域に残る日本関連史資料を調査研究し、日本とゲティン地域の交流の歴史を総合的に組み立て、解明するものである。

この研究ため、本調査研究では、当該分野の専門家との共同調査体制を構築し、以下の項目について調査研究を実施する。

(1) 考古学発掘調査

ラム川流域において発掘調査を実施し、ゲティン地域形成史を考古学的に解明するとともに、各地で出土した陶磁器と比較検討することで東南アジア大陸部東西回廊による交易様相を解明する。

(2) 水中考古学調査

1609年にラム川河口部で沈没したと記録が残る角倉氏の朱印船の存在を水中考古学調査によって確認する。

(3) 日本関連史資料の調査

ハンノム院の研究者とともにハティン省在住の一家に伝わる日本人の名前が記されている家譜の調査を実施する。また、ゲティン地域発見の火縄銃の年代、製造地を特定し、日本との関連の有無を確認する。

(4) 調査成果の発信

上述の調査研究の成果は国内外の学会で順次報告する。同時に調査成果を積極的に社会に発信するとともに、英語などでも国際的発信をおこなう。

4. 研究成果

(1) 考古学発掘調査

17世紀前半にゲティン地域の貿易を統括していた役人で、日本人の女性を養女に迎え入れていた文理候およびその一族の故郷であるハティン省カンロック県キムロック村において2018年に発掘調査をおこなった。出土遺物の様相から、17世紀以前から居住域であったことがわかった。また、17世紀にゲティン地域の名家・阮家に嫁いだ日本人女性の居住想定地であるハティン省カンロック県チュンロック村で発掘調査を実施した。遺物は16～18世紀の中国やベトナムの陶磁器がほとんどで、当該地域が16世紀以降に居住域となったことがわかった。

一連の調査で出土したベトナムや中国の陶磁器の様相はゲティン地域の港、ホイトン遺跡出土品と共通性があり、これらの貿易品が内陸部の居住域にまでもたらされ、流通、使用されていたことが確認できた。なお、17世紀の日本人と関連する遺構、遺物は発見できなかった。

これまでの発掘調査で出土した遺物の整理作業(代表的な遺物の実測など)を現地にて行い、日本において遺構、遺物写真の整理を行い、報告書として公開するための準備をすすめた。

(2) 水中考古学調査

2017年10月に、日本の水中考古学専門家らとともにハティン省沿海部を船で踏査し、川から沿岸部一帯をサイドスキャンソナーで広く調査することが有効であるとの知見を得た。また、一隻の沈没船の存在を確認した。

2019年5月に、1609年にラム川河口部で沈没したと記録が残る角倉の朱印船の調査を実施した。サイドスキャンソナーを用いて河口部から沿岸部にかけての海中を広く探査したが、船体の存在は確認できなかった。この探査結果から、河口部には砂が厚く堆積していることがわかり、今後の調査の進め方について現地研究者らと協議した。

(3) 日本関連史資料の調査

ベトナムのハンノム院研究者と共同で、17世紀に日本人女性が嫁いだハティン在住の阮家に伝わる家譜の調査を行い、家譜にかかれた地名などを抽出。これらの地名については、現在も調査を継続している。

17世紀のゲティン地域にはキリシタンの日本人が住んでいたことから、古地図に記された教会の位置と照らしながら、沿岸部の教会の分布調査を実施した。この調査により、沿岸部には歴史的な教会が残存していることがわかった。今後、これらの教会を詳細に調査し、設立年代などを特定していく調査に発展させる。

ラム川河口部において発見された火縄銃を調査し、東南アジアで製作されたものであろうという結果を得た。種子島に伝来した鉄砲は倭寇によって東南アジアから伝来したとされており、今後、種子島鉄砲との比較検討を継続していく。

(4) 調査成果の発信

学会、学術誌等での発表

国内外の学会やセミナーにおいて、2017年に2回、2018年に5回、2019年には3回、日本語や英語、ベトナム語で調査研究成果を発表した。

特に、国際的な発信に努め、2019年は、これまでの考古学調査の成果を日本、ベトナム両国の研究者間で共有するための国際セミナーをハティン省にて開催した。

そして、本研究の成果をまとめた学術論文を2017年に2本、2018年に1本、2019年には2本発表した。なお、本科研の研究成果は、ベトナム語での図書の出版を予定している。

社会発信

日本国内に対しては、学会での発表がきっかけとなり、読売新聞朝刊の文化欄に研究成果を紹介する特集記事が大きく掲載された。また、シンクタンク広報誌巻頭言など、一般向けニュースレターなどで研究成果をわかりやすくまとめ、多くの反響を得た。さらに、NHKによるベトナムでの調査の様子や成果についての取材を受け、今後日本において放映予定である。

国際的には、調査の様子などを現地ベトナムのテレビ局や新聞社が取材、撮影しており、日本とベトナムの交流の歴史や国際的な共同調査の様子、成果をベトナムの市民にも発信することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 菊池百里子	4. 巻 150
2. 論文標題 近世:ベトナムにおける陶磁器流通	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊考古学（特集 考古学はどこへ行くのか）	6. 最初と最後の頁 75-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊池誠一、菊池百里子	4. 巻 23
2. 論文標題 ベトナム島嶼部の考古学：回顧と展望	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 昭和女子大学文化史研究	6. 最初と最後の頁 69-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊池百里子	4. 巻 5
2. 論文標題 大越国陳朝期の交易と海域アジア	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 専修大学社会知性開発研究センター古代東ユーラシア研究センター年報	6. 最初と最後の頁 103-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.34360/00008308	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菊池百里子	4. 巻 4
2. 論文標題 ベトナム北部の朱印船寄港地、ゲティンにおける日越交流の新展開	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 専修大学社会知性開発研究センター古代東ユーラシア研究センター年報	6. 最初と最後の頁 175-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.34360/00008288	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Dang Hong Son, Nguyen Van Anh, Kikuchi Yuriko	4. 巻 496
2. 論文標題 Nhan thuc ve thuong cang Hoi Thong qua tu lieu Lich su va Khao co hoc (ベトナム語)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Nghien Cuu Lich Su (歴史研究)	6. 最初と最後の頁 30-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 菊池 百里子
2. 発表標題 ベトナム出土銅銭の考古学的研究
3. 学会等名 昭和女子大学文化史学会第36回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KIKUCHI Yuriko
2. 発表標題 Quan he Nghe Tinh - Nhat Ban nhìn tu cac tu lieu lich su (歴史的資料から見た日本とゲティン地域の関係)
3. 学会等名 GIAO LUU VIET - NHAT QUA TAI LIEU KHAO CO HOC HA TINH (ハティンの考古資料から見た日越関係) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菊池百里子・三宅俊彦・櫻木晋一・Hoang Van Khoan・Dang Hong Son
2. 発表標題 ベトナム・ハティン発見の一括出土銭 寛永通寶、長崎貿易銭からの考察
3. 学会等名 日本考古学協会第85回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菊池 百里子
2. 発表標題 宋元明初の海域交流と東南アジア ベトナム陶磁を中心に
3. 学会等名 第63回国際東方学会議（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菊池 百里子
2. 発表標題 沖縄出土のベトナム陶磁器が語る15世紀
3. 学会等名 2018年度東南アジア考古学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KIKUCHI Yuriko
2. 発表標題 Di tích Van Don thoi ky chong xam luoc quan Mong Nguyen（元寇期のヴァンドン遺跡）
3. 学会等名 Bach Dang va nha Tran trong boi canh the gioi the ky 13（13世紀の国際環境における陳朝とバクダン）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菊池 百里子
2. 発表標題 大越国陳朝期の交易と海域アジア
3. 学会等名 専修大学古代東ユーラシア研究センター シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KIKUCHI Yuriko
2. 発表標題 The acceptance and circulation of Chinese coins in Vietnam
3. 学会等名 The Fourth Asian Association of World Historians Congress (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菊池 百里子
2. 発表標題 ベトナム・ハティン省ラム川河口部における発掘調査と出土陶磁器
3. 学会等名 日本考古学協会第83回総会口頭研究発表
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Dang Hong Son, Nguyen Van Anh, Kikuchi Yuriko
2. 発表標題 Thuong cang Hoi Thong: Tu Lieu Lich Su va Khao Co Hoc (ベトナム語)
3. 学会等名 International Conference; Central Vietnam's Trading Port System in the Maritime Silk Road Roles and Connections (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

(1) 展覧会図録 菊池百里子「コラム 海域アジアにもたらされたベトナム青花」『博特別展 シルクロード新世紀 - ヒトが動き、モノが動く - 』古代オリエント美術館、2018年
(2) ニュースレター 菊池百里子「日本とベトナムの交流(上)(下)」『hoa hoa 日本ベトナム文化交流プロジェクト ニュースレター』第86、87号、2018 菊池百里子「巻頭言 意外と盛んだった江戸初期の日越交流」『TOYRO BUSINESS』Vol.178 (pp1) 自然総研、2017
(3) 新聞記事 「ベトナム北部に日本人痕跡」読売新聞(朝刊)文化欄、29面、2017年7月5日

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----